

平成21年6月1日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2007～2008

課題番号：19820039

研究課題名（和文） 古代日本語の書記法と和歌表現の展開についての研究

研究課題名（英文） NOTATIONAL SYSTEMS AND LITERARY EXPRESSIONS OF WAKA POEMS.

研究代表者

杉山 典子（新沢 典子）(SUGIYAMA NORIKO <SHINZAWA NORIKO>)

鶴見大学・文学部・講師

研究者番号：60454162

研究成果の概要：日本語は、漢字仮名交じり文を主とする特徴的な文字体系を有している。かかる表記は、研究者間に留まらず、国内外で広く関心を集めている。

とりわけ近年では歌の書かれた木簡が相次いで発掘の成果されており、現代日本語の特殊な形式に繋がる古代日本語の書記法は、さらに注目されることとなった。

本研究は、古代の書記資料として最大の万葉集を対象として、和歌集という文芸作品における古代日本語の書記法の展開と表現との関わりを明らかにした。

具体的には、以下の3点を中心に調査を行い、その成果を論文形式で公表した。

(1) 平安期以降の仮名万葉に採録された歌の原表記を調査、比較し、平仮名に変換された際の表現の変化を分析した。

(2) 仮名表記された歌における助辞の機能を調査した。特に大伴家持作歌に注目し、注記の文字との共通性とその傾向をデータ化、分析した。

(3) 奈良から平安期の和歌における表現形式化についての調査を行った。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,800,000	270,000	2,070,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：上代文学、万葉集

1. 研究開始当初の背景

古代言語資料として最大のボリュームを持つ万葉集には大きく分けて三種類の

書記法が併用されており、その展開は、万葉集研究の中で、個別の歌人や日本語の書記法の問題と絡めて、長らく議論されてきたところである。ところが、近年の相次ぐ

発掘調査により、訓字に仮名を添えたものから一字一音表記へという従来の表記史は見直しの必要に迫られた。

歌を記した木簡については、その形態、文字法などについて、考古学者、歴史学者の発言が相次いでいるが、とりわけ和歌を記したものについては、用いられた用途や場の問題、文芸作品としての万葉歌との関わりなど、文学的アプローチが不可欠であった。

各研究目標に関しての個別の状況は以下のようにであった。

(1) 歌の書かれた木簡、特に万葉歌の書かれた木簡が発掘されたが、その書き様は万葉集などの文学作品に記されたものと大きく異なっており、発掘成果を参照しつつ、まずは万葉集の中での表記選択について、歌の性格や表現との関わりを明らかにする必要があった。

(2) 古代の文字表記のうち、文学作品における表記と表現内容との関わりが十分に解明されていなかった。書記法の展開という線状的な書記史の把握が先行するあまり、従来は表記と表現との関わりが十分に注目されてきたとはいえない。特に、仮名万葉を扱いながら、奈良から平安期を跨いでの表記と表現との変化とその関わりを対象とした研究は、多くはなかった。

以上を踏まえ、研究代表者は、万葉歌の表記を、まず日本語の表記史ということから切り離して捉える必要があると考えた。

その中で、複数の書記法の中からある選択を選ぶ際の最大の要因として、和歌表現に注目した。

2. 研究の目的

古代の書記を考える上で、最大のボリュームをもつ言語資料である万葉集を参照せざるを得ないわけだが、万葉集は文芸作品であり、その表記を考える上で、作歌年代や筆録者、場といった個別の問題を考慮に入れる必要がある。

事実、それらの表記は発掘資料に残る書記のあり様と必ずしも一致しない、このことは、書記法の解明に、語学的な分析に加えて、テキストの文学的なアプローチが必要であることを示唆するものと考えた。

研究代表者は、上記の点をふまえ、特に

奈朝後期の歌人である大伴家持の書記法と表現に注目し、その観察を通じて、対象を和歌に限定して、和歌表現における古代日本語の書記法の展開を明らかにすることを試みた。

また、書記法が大きく転換した平安期以降に筆録された同じ歌を観察することによって、書記法の変化と表現技法の関わりとを明らかにしようと考えた。

(1) 万葉集などの文学作品に見られる表記と木簡に見られる日常普段の書き様との関わりを考える。特に文学作品の表現や技法と表記との関わりに注目する。

(2) 書記法が文学の表現とどのように関わっているかを、奈良期以前から平安期以降の和歌を通時的に見通し、漢字による仮名表記と平仮名表記された場合を引き比べつつ明らかにする。

この調査は、平安期の万葉歌の実態を明らかにし得るという点で、享受史研究にも資するところが大きいと考えられる。

3. 研究の方法

万葉歌の多くは正訓字に仮名を添えた表記を採る。仮名書き例は、巻十五の大宰府関係歌、東歌、防人歌、巻十七以降の大伴家持と周辺歌人の歌というように、奈良朝の歌に限定的に表れるのみである。平安期に平仮名が完成することを考えれば、奈良朝後期の歌が仮名書きされるのは当然といえるが、大伴家持はその一方で、正訓字仮名交じり表記も多用している。

両者を併用する一人の筆録者の文字法を観察することで正訓字と仮名の使い分けを明らかにし得ると考えた。

平安期以降に平仮名によって書記されたいわゆる仮名万葉を調査することによって、表記の変化が表現にもたらす影響を観察することを試みた。かかる作業によって、文体の中で正訓字や仮名がどのような機能を担っていたのかを解明することが可能になると考えたためである。

具体的には以下の方法を試みた。

(1) 正訓字主体表記と仮名表記を併用した大伴家持作歌の表記と表現との関わりに注目する。本人による筆であることが明らかであり、比較的資料が豊富なためである。

まず、万葉集の、大伴家持の筆録によると考えられる歌について、正訓字主体、一

字一音表記のものを抜粋し、その現れ方を巻や場ごとに分類した。

また後者と家持の関わったと思しい異伝注記に使用された仮名とを引き比べその離れ具合を観察し、データ化した。

(2) 平安期以降の仮名万葉に採録された歌の原表記と採録の偏りを調査した。具体的には、古今和歌六帖、人麿集、家持集、万葉の古注釈である万葉集抄を対象とし、その上で、表現の変化と表記の関わりを観察した。

4. 研究成果

(1) 万葉集は、多くの異伝注記を含んで成り立つ歌集である。その注記の文字をデータ化し、観察したところ、家持作歌中の仮名表記には、多くの点で異伝注記の表記との共通性が認められることが明らかとなった。異伝注記の文字は、習書木簡の文字遣いなどと近い。仮名表記の歌にも特別な選択意識などない、日常普通の文字遣いであったことがわかる。

ただし、家持歌には、係助詞や終助詞など、助辞に対する特別な意識が確かめられる(研究成果雑誌論文2)。また、正訓字主体の歌の中には、音注を用いたものもあり、単なる日常普通の文字遣いというのではなく、音を復元するのに容易な表記として敢えて仮名表記を選択するという側面があったものと考えられる。

家持に留まらず、田辺福麻呂など同時代の歌人の作品についての検討も行ったが、その中で歌集歌と作歌という枠組みについて従来とは異なる捉え方を提示した。(研究成果 雑誌論文1)

(2) 正訓字を用いる場合、助辞を省くことで格が曖昧となることがある。そうした漢字で日本語韻文を記録する際に起こる不都合を逆手にとって、一つの語を二重に機能させる技法のある(研究成果 学会発表2)。

一連の語に複数の意味を埋め込むような視覚的な技法は、平安期以降の和歌になって生じた、平仮名文ゆえの特徴であると考えられてきたが(小松英雄『やまとうた』等)、奈良朝の正訓字仮名交じり文において存在していたことが明らかとなった。

さらに、上記の歌が、平安期以降、平仮名で表記される場合、訓字表記に隠されていた多重表現は、時代の歌風に合わせて3

句切れの歌として認識され、片方の意味を失ったまま享受されている実態を確かめた。

(3) 平安期以降の仮名万葉に採録された歌の原表記と採録の偏りを調査する中で、古今和歌六帖について、異伝注記を有する万葉歌が収録される場合、本文ではなく異伝注記が採られていることが判明した(研究成果 雑誌論文3)。平安期に存した万葉集が部分的に現在のものとは異なっていた可能性を示唆する。

異伝については、従来、伝承の結果生じた歌詞の揺れといった極めて曖昧な捉え方がなされてきたわけだが、一部の異伝に関しては、別の書記テキストによる校合の跡であると見なし得る。

異伝記載歌について、平安期以降の文献への採録状況を調査し、異伝記載歌が、万葉集を介さずに平安期以降の仮名万葉に流入していった可能性については引き続き調査していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 新沢典子「田辺福麻呂関連歌の宮廷讃歌性について」『鶴見大学紀要』(第一部日本語・日本文学編) 46号、2009年3月、53~71頁。査読無。
- ② 新沢典子「万葉歌における希望の終助詞『ね』の偏在について」『鶴見日本文学』第13号、2009年3月、1~15頁。査読無。
- ③ 新沢典子「古今和歌六帖と万葉集の異伝」『日本文学』(日本文学協会) Vol.57, No. 1、2008年1月、2~11頁。査読有。

[学会発表] (計2件)

- ① 新沢典子「大伴家持の防人関係歌群について—家と旅とをめぐって—」美夫君志会特別例会(於中京大学アネックス)、2009年3月8日。

- ② 新沢典子「家持歌の手法―「眺春苑桃李花作二首」をめぐって―」萬葉学会第60回全国大会（於大阪市立大学基礎教育実験棟）2007年10月20日。

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉山 典子（新沢 典子）
（SUGIYAMA NORIKO 〈SHINZAWA NORIKO〉）
鶴見大学・文学部・講師
研究者番号：60454162

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者